心豊かな世代が育つ童話の里づくり426

―シリーズ― あなたの人権・わたしの人権

「身近な差別」

玖珠美山高等学校　2年
矢部　里苑

日常生活の中で、「陰キャ」や「陽キャ」という言葉を耳にしたことがありますか。

今では私たちの世代で、ごく当たり前のように使われることの多い言葉ですが、これも「差別」の一つではないかと思います。

世の中には多くの差別があります。一口に「差別」といっても、世界規模から学校内のちょっとした人間関係のものまで様々です。私は、そういった「差別」の中でも、その人の趣味や性格に対するものがとても気になります。

私が中学生の頃、ある女の子が「あの子、絶対に『陰キャ』でしょ。本当に無理なんだよね。」と言っていたことがありました。

その女の子が言った「あの子」は、みんなの中心にいて行動するタイプではありませんでした。

私は、「あの子」とも仲が良かったので、女の子の言葉が私にも向けられているような気がして、ただ女の子に合わせることしかできませんでした。

高校生になった今でも、「陰キャ」という言葉が友だちから出ると、暗に自分に対して言っているのではないかと思い、怖くなります。

また、世の中には、その人が好きな物事を馬鹿にする風潮があります。

その一つとして、「オタク」に対するものが挙げられます。

「オタク」とは、特定の物事に熱中し、それに対する豊富な知識を持つ人のことです。

好きな物事があって、それについて詳しく調べて自分の周りの人と情報を共有し合うということは、何らおかしなことではないはずです。

しかし、アニメや漫画が好きな人に対して、インターネット上で馬鹿にするような書き込みを見ることがあります。

そういった書き込みの中には、ただ作品を褒めただけなのに、返信メッセージとして、褒めた人本人や作品を貶めているものがあります。

あるサイトでは、コメントの返信メッセージ欄で、特定のアニメや漫画が好きな人とそうでない人が言い争いをしている場面を見かけます。

両者が言い争っていることは、本来のコメントとは全く関係のないことであることも多く、元のコメントの投稿者や返信メッセージ欄を不用意に開いてしまったサイトの閲覧者が心無い言葉に傷ついていることがあります。

これこそが「差別」の怖さだと思います。

言われた人だけではなく、その言葉を聞いた人でさえも傷つけられることがあります。

よく「言葉のナイフ」と言いますが、まさにそうだと思います。

私が周りの友だちなどにも軽い気持ちで発する言葉は、最も身近な「差別」の元になります。

何か言うときには、自分の言葉が「差別」に繋がっていないか考えたい。

また、考えるべきだと思います。

この人権作文について、意見や感想、激励など、お寄せください。

また、みなさんの投稿もお待ちしています。

わたしたちをとりまく様々な不合理や差別について気づいたことや感じたことを一、二〇〇字程度にまとめてみましょう。住所、氏名、連絡先電話番号を記入して（匿名も可）、玖珠町教育委員会社会教育課「あなたの人権・わたしの人権」までお届けください。